

旧宣教師館 夏のイベント報告



■『赤い鳥』と楽しむ、おはなし会



▲館内で自由に全巻を閲覧できる『赤い鳥』復刻版

当館のおはなし会は、豊島区ゆかりの児童雑誌『赤い鳥』をもっと多くの方に知つてもうための取り組みとして、本年度から装いを新たにスタートしました。

7月28日（日）の記念すべき初回では『赤い鳥』作品から小川未明「つきよとめがね」、児童文学作品からあまんきみこ「しろいぼうし」の読み聞かせを楽しんでいただきました。『赤い鳥』の復刻版全巻を配架する部屋の雰囲気も相まって、ご参加の皆さんには深く物語の世界を味わっていただけたかなと思います。今年度は10月、3月にも開催予定です。

■朝顔と紋切りでうちわをつくろう

8月20日（火）に夏休みの親子体験イベントとして、うちわづくりを開催しました。3組5名の方にご参加いただき、江戸時代に大流行した変化朝顔や紋切り遊びについて、楽しく学ぶ90分間でした。

朝顔の押し花をうちわと和紙に挟んでのり付けする工程は特に難しいのですが、皆さん丁寧かつ美しく仕上げていました。変化朝顔の珍しい色や形に子どもたちが興味を持ってくれていたのも、夏休みの貴重な体験になったかなと思います。

うちわを乾かす間に楽しんだ紋切りでは、光琳蝙蝠や五芒星といった繊細な形を、慎重かつ大胆に切り抜きました。折った紙を開いた瞬間に出来上がった形があらわれる感動は予想以上に大きいものです。

イベントをきっかけに初めて当館に足を運んでくださった方もいらして「初めて宣教師館に来たけれども、今度はお友達を誘ってまた来たい」との嬉しい声も。これからもイベントを通じて楽しみながら、より多くの方に当館を知つていただけたらなと考えています。

■ナイトミュージアム～夕涼みナイト～



▲夕暮れの宣教師館。普段とは違うあたたかさがあります。

夏休みも終盤に差し掛かった8月25日（日）には、今年度からスタートした新イベント、「ナイトミュージアム」を開催しました。

日中は今年の夏を象徴するような大変暑い日でしたが、夕方になるとだんだんと気温も下がり、風が少し心地良く感じる「夕涼み」にふさわしい雰囲気になりました。お客様が「夕陽を感じながらゆっくり楽しめて嬉しい。夕暮れに染まる館がとてもきれい」とおっしゃっていたのが、スタッフ一同とても嬉しかったです。

特別開催したギャラリートークでは13名の方がご参加ください、夕涼み気分で宣教師館の魅力をより楽しんでいただけたかなと思います。

次回は12月に開催予定です。冬の当館は暗闇にやさしく光るガラス窓がとても魅力的です。ぜひお越しください！

（中村 岳）

雑司が谷旧宣教師館だより

第73号

2024年9月25日

豊島区立雑司が谷旧宣教師館

〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷1-25-5 TEL/FAX 03-3985-4081

<http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html>

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS

「春のしらべに耳を澄ませて」 ースpringコンサート開催レポート



▲ピアニストの宇井紗也香さん（左）とソプラノ歌手の樋上佳薫さん（右）

5月12日（日）にピアニストの宇井紗也香さん、ソプラノ歌手の樋上佳薫さんをお招きしてスプリングコンサートを開催しました。昨秋のオータムコンサートに引き続き久々の開催となりましたが、定員の3倍を超える多くのご応募をいただきまして、大盛況での実施となりました。

当日が母の日だったことから1曲目は「おかあさん」（中田喜直作曲）からスタート。

宇井さんが奏でる歴史あるウェスタンピアノのやさしい音色と、樋上さんの美しい歌声が宣教師館全体に響きます。終盤にはおふたりが大好きだという作曲家・木下牧子さんについて、MCにて詳しく解説してくださるひとコマも。より曲の背景を知ってから、『花のかず』より「竹とんばに」「あさっておいで」「ある日のたび」の演奏を楽しめます。親しみやすいメロディーと歌詞に、お子さんが喜んで肩を揺らしながら耳を傾けていたのが印象的でした。

アンコールでは「春よ、來い」（松任谷由実作詞・曲）の演奏で、会場全体が一体感に包まれました。ご来場のお客様からも「さわやかな空気感に包まれて、幸せな気持ちになりました。」と春を楽しむ、素敵なコンサートになりました。

次は11月3日（日・祝）にオータムコンサートが開催されます。ぜひ、ご注目ください！

（中村 岳）



▲曲についてのMCもお客さんから大好評でした。

としまと『赤い鳥』

— 旧宣教師館はじめての企画展を振り返る 3 —

大正から現代まで続く、豊島区の児童文化

2022（令和4）年、豊島区が区制90周年を迎えるにあたって当館で開催された、企画展「としまと『赤い鳥』～区制90年を彩る児童文化～」。「雑司が谷旧宣教師館だより」71号・72号では、企画の主旨や展示構成、展示で取り上げた5人の作家や詩人、画家（鈴木三重吉、坪田譲治、深澤省三、北原白秋、芥川龍之介）について触れました。

※過去の「雑司が谷旧宣教師館だより」は、公式ホームページからご覧いただけます。右の二次元コードを読み取っていただくか、インターネットで「雑司が谷旧宣教師館だより」と検索してください。



最後にご紹介するのは、当館1階の『赤い鳥』コーナーで放映された小森香子氏^{こもりきょうこ}[1]の朗読映像です。

当館では2003（平成15）年4月より、区在住の詩人であった小森氏の朗読イベント「『赤い鳥』を語り継ぐ、おばあちゃんのおはなし会」を開催していました（2023年に事業終了）。

イベントの様子を撮影した動画のうち、展示でも取り上げた芥川龍之介の「蜘蛛の糸」のほか、雑司が谷に居住歴のある作家の作品から、小川未明の「飴チョコの天使」と「月夜と眼鏡」、菊池寛の「八太郎の鶯」を選び、開館中はいつでもご覧いただけるようにしました（図1）。

この朗読映像の上映は、「『赤い鳥』の部屋」で作品を実際に読む以外にも、朗読を聴くことで、『赤い鳥』を様々な角度から楽しめるように配置したものでした。しかし、実はそれ以外にも、朗読の映像をみていただきたい理由がありました。

三重吉の発刊した『赤い鳥』は上質な文学を児童に提供し、さらには、新しい作家が育っていく場でした。『赤い鳥』で活躍した坪田が、第二の『赤い鳥』を目指して童話雑誌『びわの実学校』を創刊し、経歴を問わず創作のために広く門戸を開いたことで、大石真^{おおいしまこと}[2]や寺村輝夫^{てらむらてるお}[3]、あまんきみこ⁴など、多くの作家が誕生します。

実は、小森氏も『びわの実学校』に寄稿し、童話が採用されたことがあります。幼少期から文学に親しみ、文筆活動にも励んでいた小森氏は、『びわの実学校』に「しらかばの女王」を投稿し、つづいて連載作品の「なんでも知ってるおじいさんの金の髪の毛」を発表しています。



▲図1 朗読イベント「『赤い鳥』を語り継ぐ、おばあちゃんのおはなし会」の映像をループ再生でいつでもご覧いただけるようにしました。

坪田を紹介した展示コーナーでは、『赤い鳥』の展示のほか、『びわの実学校』の創刊号である1号と、5号を展示しました（図2）。

「しらかばの女王」が掲載された『びわの実学校』5号を展示して、坪田が主宰する童話雑誌には様々な作家が投稿したこと、当館でおはなし会を行う小森氏も投稿を行っていたことを説明することで、小森氏の朗読映像への導入を担うとともに、三重吉から坪田へ受け継がれた童話の精神が、小森氏の活動を通じて現代の豊島区でも継承されていることを実感していただきたいと考えました。



▲図2 左奥に『びわの実学校』5号を展示。

広がり、繋がった『赤い鳥』と豊島区

三重吉が生み出した『赤い鳥』の童話、童謡、童画は、読者の子供たちへ届くだけでなく、学校教育にも使用されました。戦後、小学校の国語教科書には27作品、中学校では20作品が採用されています[5]。令和6年度の国語の教材でも、新美南吉「ごんぎつね」が小学校4年の教科書（光村図書、東京書籍、教育出版）に、中学校1年の教科書には芥川龍之介「蜘蛛の糸」（教育出版）が使用されています。

ほかにも、児童文学の歴史にも影響を与えており、『赤い鳥』における新人作家の育成にはじまり、『赤い鳥』を読んだ子供たちの中にも、文学の道を志す人も現れました[6]。こういったなかで、特に豊島区での児童文学の系譜を繋いだのは坪田であり、三重吉と同じく豊島区内で『びわの実学校』を発行して後進を育て、さらに個人図書館「びわの実学校」を自宅に設けることで、地域の学生たち、研究家の集う場を開いたことは、次世代への貢献を果たしたといえます。

この展示を開催することで、豊島区と児童文学の関わり合い、児童文学とそれに携わり、関わり合う人々の軌跡を感じ、これまで以上に文学に親しみを持つ方が増えたら幸いです。

（小山勝美）

脚注

[1] 当館における小森香子氏の活動については、「雑司が谷旧宣教師館だより」67号などに記載。

[2] 大石真（1925–1990）児童文学作家。代表作に『チョコレート戦争』など。

[3] 寺村輝夫（1928–2006）児童作家。代表作に『ぼくは王様』シリーズ、『わかったさん』『こまったくさん』シリーズなど。

[4] あまんきみこ（1931–）児童文学作家。代表作に『ちいちゃんのかげおりくり』、『車のいろは空のいろ』。

[5] 『赤い鳥事典』（赤い鳥事典編集委員会、2018年）によると、新美南吉「ごんぎつね」、芥川龍之介「蜘蛛の糸」「杜子春」、有島武郎の「一房の葡萄」、北原白秋「からたちの花」などが採録。

[6] 実業之日本社から1946（昭和21）年に発行された『赤とんぼ』が影響を受けた童話雑誌といえる。創刊者の藤田圭雄は旧制中学時代に『赤い鳥』を愛読、童謡を投稿しており、創刊の辞では「鈴木三重吉氏によって主唱された赤い鳥の運動をわれわれはまだ昨日のことのやうに覚えている」とし、『赤い鳥』の輝かしい時代が再興されることを願った。編集顧問には大佛次郎、川端康成、岸田國士らが加わった。竹山道雄の「ビルマの豊饒」が掲載されたことで有名。